

2009 年度第 5 回中等教育機関日本語教師研修会：報告

今回は、陳明姿先生(台湾大學文學院副院長・日本語文學系教授)、彭春陽先生(淡江大學日本語文學系副教授・系主任)、邱若山先生(靜宜大學日本語文學系副教授・系主任)、緒方智幸先生(東海大學日本語文學系講師)をパネリストにお招きし、「高校と大学の連携の方向性を探る」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

日 時：2010 年 1 月 9 日(土) 14:00~17:00

参 加 者：台湾の中等教育機関日本語教育関係者 23 名

まず前半の現状報告では、初めに陳明姿先生から台湾大学日文系の学生受入状況についてご説明がありました。学生の出身高校紹介に続き、申請入学には日本語の試験があり、能力試験三級程度を要求しているが、実際は一級合格者が入ってきていること、一般入学者 215 名に対するアンケート調査(有効回答者 113 名)では入学前の日本語既習者は 64 名であったことなどが報告されました。更に、日本語既習者に対しては一学期の授業を免除し、教師が課題を与える、または初級 8 単位を上級の 8 単位と取り替える等の措置を取っていること、授業では「みんなの日本語」を使っているが、上級レベルの深い内容を補充するため日本語既習者も 2 学期には戻ってくる傾向にあること、初歩から始めた学生でも徐々に既習者に近づき、四年生の転学生の上位 4 名がゼロから日本語を始めた学生という現状なども報告されました。また、中山女中で実施中の「予修大学第二外国語課程専班」には 2 名の講師を派遣しているとのことでした。

次に、彭春陽先生から淡江大学日文系の学生受入状況についてご説明があり、学生の出身高校紹介では、全国各地から一校につき 1、2 名と平均した受入状況となっていることが示されました。大学卒業時に英語のハードルがあるため、入学時は日本語より英語を重視していること、推薦入学者が 40 名、申請入学者が 80 名と倍増していること、専門科目試験のない編入試験による編入生が現在 107 名にのぼっていること、推薦入学は学習意欲を重視しており、日本語ゼロでも取っていることなどが報告されました。そして、日本語既習者対策として初級日本語 12 単位を必修から選択に変更したが、現実には好成績を取らんがため敢えて初級から履修する既習者が多いとのこともありました。

引き続き、邱若山先生から靜宜大学日文系の学生受入状況についてご説明があり、①一般入試、②推薦入学、③四技二専推薦入学、④編入の 4 つの入口があり、③を行っているのは現在靜宜大学のみであること、④の編入生が多く、200-300 人が受験して合格者の 98%が入学していること、昨年の三年への編入生は 27 名で、編入試験では日本語学科独自の試験も行っていることなどが報告されました。日本語既習者対策としては、基本科目は試験に通れば「免修」とするが「低免」は行わず選択科目で補わせている。しかし、現実には淡江大学同様、好成績のために基礎科目を取る学生が多いとのことでした。更に、靜宜大学も「予修大学第二外国語課程専班」に講師を派遣しているが、参加校を増やすことが必要であると説かれ、大学から高校への希望として、例えば高中が 4 級から 3 級レベルを、高職が 3 級から 2 級、大学が 2 級から 1 級レベルの教育を分担できるよう連携ができればよいのではないかとのお話もありました。

後半は、質疑応答が行われ、高校で三年間日本語を勉強した学生が大学で初級日本語をとる状況、或いは好成績のためにもう一度とる学生の問題、能力試験一級合格で入学した学生にとっての大学卒業条件の問題、大学教員と高校教員の忙しさの差異や高校の教師不足の問題、高校日本語の発展を妨げている教育部の教学大綱の問題等々、様々な問題について質疑応答、討論が行われました。

以上のように、今回は、やや少な目の参加者ながら、非常に多くの有意義な意見交換が行われた研修会となり、終了後のアンケートでは「たくさんの成果を収めた」、「教授が熱心に詳しい説明をして下さった」などの好意的な感想の他、「五専や技術学院、公私立科技大学の先生をお誘いして論題の多様性を増したらいいと思う」、「一部の高校で第二外国語を開講できないのは経費や行政に関わる問題なので、できれば現役の高校役員（教務主任など）を誘って討論を行い、意見交換したほうがいいと思う」など、今後の研修会に向けての建設的な意見も多く寄せられました。

陳明姿先生



邱若山先生



彭春陽先生



緒方智幸先生



研修会の様子

